

納豆合戦（菊池寛）

一

皆さん、あなた方は、納豆売の声を、聞いたことがありますか。朝寝坊をしないで、早くから眼をさましておられると、朝の六時か七時頃、冬ならば、まだお日様が出ていない薄暗い時分から、

「なっと、なっとう！」と、あわれつばい節を付けて、売りに来る声を聞くでしょう。もっとも、納豆売は、田舎には余りないようですから、田舎に住んでいる方は、まだお聞きになったことがないかも知れませんが、東京の町々では毎朝納豆売が、一人や二人は、きつとやって来ます。

私は、どちらかといえば、寝坊ですが、それでも、時々朝まだ暗いうちに、床の中で、眼をさましていると、
「なっと、なっとう！」と、いうあわれつばい女の納豆売の声を、よく聞きます。

私は、「なっと、なっとう！」という声を聞く度に、私がまだ小学校へ行っていた頃に、納豆売のお婆さんに、いたずらをしたことを思い出すのです。それを、思い出す度に、私は恥しいと思います。悪いことをしたもんだと後悔します。私は、今そのお話をしようと思います。

私が、まだ十一二の時、私の家は小石川の武島町にありました。そして小石川の伝通院のそばにある、礪川学校へ通っていました。私が、近所のお友達四五人と、礪川学校へ行く

道で、毎朝納豆売の盲目のお婆さんに逢いました。もう、六十を越しているお婆さんでした。貧乏なお婆さん見え、冬もボロボロの袴を重ねて、足袋もはいていないような、可哀そうな姿をしておりました。そして、納豆の苞を、二三十持ちながら、あわれな声で、

「なっと、なっとう！」と、呼びながら売り歩いているのです。杖を突いて、ヨボヨボ歩いている可哀そうな姿を見ると、大抵の家では買ってやるようでありました。

私は最初のうちは、このお婆さんと擦れ違っても、誰もお婆さんのことなどはかまいませんでしたが、ある日のことです。私達の仲間で、悪戯の大將と言われる豆腐屋の吉公という子が、向うからヨボヨボと歩いて来る、納豆売りのお婆さんの姿を見ると、私達の方を向いて、

「おい、俺がお婆さんに、いたずらをするから、見ておいで。」
と言うのです。

私はよせばよいのにと思いましたが、何しろ、十一二という悪戯盛りですから、一体吉公がどんな悪戯をするのか見ていたいという心持もあって、だまって吉公の後からついて行きました。

すると吉公はお婆さんの傍へつかつかと進んで行って、

「おい、お婆さん、納豆をおくれ。」と言いました。すると、お婆さんは口をもぐもぐさせながら、

「一銭の苞ですか、二銭の苞ですか。」と言いました。

「一銭のだい！」と吉公は叱るように言いました。お婆さんがおずおずと一銭の藁苞を出しかけると、吉公は、
「それは嫌だ。そっちの方をおくれ。」と、言いながら、いき

なりお婆さんの手の中にある二銭の苞を、引ったくってしまった。お婆さんは、可哀^{かあい}そうに、眼が見えないものから、一銭の苞の代りに、二銭の苞を取られたことに、気が付きません。吉公から、一銭受け取ると、

「はい、有難うございます」と、言いながら、又ヨボヨボ向うへ行っていました。

吉公は、お婆さんから取った二銭の苞を、私達に見せびらかしながら、

「どうだい、一銭で二銭の苞を、まき上げてやったよ。」と、自分の悪戯を自慢するように言いました。一銭のお金で、二銭の物を取るのには、悪戯というよりも、もつといけない悪いことですが、その頃私達は、まだ何の考^{かんがえ}もない子供でしたから、そんなに悪いことだとも思わず、吉公がうまく二銭の苞を、取ったことを、何かエライことをでもしたように、感心しました。

「うまくやったね。お婆さん何も知らないで、ハイ有難うございます、と言ったねえ、ハハハハ。」と、私が言いますと、みんなも声を揃^{そろ}えて笑いました。

が、吉公は、お婆さんから、うまく二銭の納豆をまき上げたといつても、何も学校へ持って行って、喰^たべるというのではありません。学校へ行くと、吉公は私達に、納豆を一掴^{つか}みずつ渡しながら、

「さあ、これから、戦^{いくさ}ごっこをするのだ。この納豆が鉄砲丸^{てつぽうだま}だよ。これのぶつけこをするんだ。」と、言いました。私達は二組^{ふたぐみ}に別れて、雪合戦^{ゆきがっせん}をするように納豆合戦をしました。キャッキョッキョ言いながら、納豆を敵に投げました。そして面

白い戦ごっこをしました。

あくる朝、又私達は、学校へ行く道で、納豆売のお婆さんに逢いました。すると、吉公は、

「おい、誰か一銭持っていないか。」と言いました。私は、昨日^{きのう}の納豆合戦の面白かったことを、思い出しました。私は、早速^{さつそく}持っていた一銭を、吉公に渡しました。吉公は、昨日と同じようにして、一銭で二銭の納豆を騙^{だま}して取りました。その日も、学校で面白い納豆合戦をやりました。

二

その翌日です。私達は、又学校へ行く道で、納豆売のお婆さんに逢^あいました。その日は、吉公ばかりではありません。私もつい面白くなって、一銭で二銭の苞^{つと}を騙^{だま}して取りました。すると、外^{ほか}の友達も、

「俺^{おれ}にも、一銭のをおくれ。」と、言いながら、みんな二銭の苞を、騙して取りました。お婆さんが、

「はい、有難うございます。」と、言っているうちに、お婆さんの手の中の二銭の苞は、見る間に二つ三つになつてしまいました。

そのあくる日も、そのあくる日も、私達はこのお婆さんから、二銭の苞を騙して取りました。人の良いお婆さんも、家^{うち}へ帰って売上げ高を、勘定^{かんじよう}して見ると、お金が足りないのです。私達に騙されるのに、気がついたのでしょうか。そつと、交番のお巡査^{まわり}さんに、言いつけたと見えます。

お婆さんが、お巡査さんに言ったとは、夢にも知らない私

達は、ある朝、お婆さんに出くわすと、いつもの吉公が、

「さあ、今日も鉄砲丸を買わなきゃならないぞ。」と、言いながら、お婆さんの傍へ寄ると、

「おい、お婆さん、一銭のを貰うぜ。」と、言いながら、何時ものように、二銭の苞を取ろうとしました。すると、丁度その時です。急に、ググググという靴の音がして、お巡査さんが、急いで馳けつけて来たかと思うと、二銭の苞を握っている吉公の右の手首を、グツと握りしめました。

「おい、お前は、いくら納豆を買ったのだ。」とお巡査さんが、怖しい声で聞きました。いくら餓鬼大将の吉公だといって、お巡査さんに逢っちゃ堪りません。蒼くなって、ブルブル顫えながら、

「一銭のです、一銭のです。」と、泣き声で言いました。すると、お巡査さんは、

「太い奴だ。これは二銭の苞じゃないか。この間中から、このお婆さんが、納豆を盗まれる盗まれると、こぼしていたが、お前達が、こんな悪戯をやっていたのか。さあ、交番へ来い。」と、言いながら、吉公を引きずって行こうとしました。吉公は、おいおい泣き出しました。私達も、吉公と同じ悪いことをしているのですから、みんな蒼くなって、ブルブル顫えていました。すると、吉公はお巡査さんに引きずられながら、「私一人じゃありません。みんなもしたのです。私一人じゃありません。」と言っていました。するとお巡査さんは、恐い眼で、私達を睨みながら、

「じゃ、みんなの名前を言つてご覧。」と言いました。そう言われると、私達はもう堪らなくなつて、

「わあッ。」と、一ぺんに泣き出しました。

すると、傍にじつと立っていた納豆売のお婆さんです。私達が、一緒に泣き出す声を聞くと、急に盲目の眼を、シヨボシヨボさせたかと思うと、お巡査さんの方へ、手さぐりに寄りながら、

「もう、旦那さん、勘忍して下さい。ホンのこの坊ちゃん達のいたずらだ。悪気でしたのじゃありません。いい加減に、勘忍してあげてお呉んなさい。」と、まだ眼を光らしているお巡査さんをなだめました。見ると、お婆さんは、眼に一杯涙を湛えているのです。お巡査さんは、お婆さんの言葉を聞くと、やっと吉公の手を離して、

「お婆さんが、そう言うのなら、勘弁してやろう。もう一度、こんなことをすると、承知をしないぞ。」と、言いながら、向うへ行つてしまいました。すると、お婆さんは、やっと安心したように、

「さあ、坊ちゃん方、はやく学校へいらつしやい。今度から、もうこのお婆さんに、悪戯をなさるのではありませんよ。」と言いました。私は、お婆さんの眼の见えない顔を見ていると穴の中へでも、這入りたいような恥しさと、悪いことをしたという後悔とで、心の中が一杯になりました。

このことがあつてから、私達がぶつとりと、この悪戯を止めたのは、申す迄ありません。その上、餓鬼大将の吉公さえ、前よりはよほどおとなしくなつたように見えました。私は、納豆売のお婆さんに、恩返しのため何かしてやらねばならないと思ひました。それでその日学校から、家へ帰ると、「家では、納豆を少しも買わないの。」と、お母さんに、きき

ました。

「お前は、納豆を喰^たべたいのかい。」と、お母^つさんがき返しました。

「喰^たべたくはないんだけど、可^か哀^{あい}そうな納豆売のお婆さんがいるから。」と言いました。

「お前^{まへ}が、そういう心^{こころ}掛^{かけ}で買うのなら、時々^{ときどき}は買^かってもいい。お父^{とう}様^{さま}は、お好^{こう}きな方^{ほう}なのだから。」と、お母^つさんは言いました。それから、毎朝^{まいさう}、お婆^{おば}さんの声^{こゑ}が聞^{きこ}えると、お金^{かね}を貰^{もら}って納豆^{なとう}を買^かいました。そして、そのお婆^{おば}さんが、来^きなくなる時まで、私は大抵^{たいてい}毎朝^{まいさう}、お婆^{おば}さんから納豆^{なとう}を買^かいました。